

15 はくさい

地域慣行基準

【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
南佐久	25	
北佐久、木曾	20	
上記以外の地域	18	

※①前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えることとする。

②5～6月出荷の場合は、上記窒素成分量を2割上乘せするものとする。

(1) 特徴及び吸肥特性

よい結球部を作るためにはよい外葉を作ることが必要で、**初期生育を順調に進める**ことが収量増につながる。初期生育は土壤水分や通気性などに影響を受けやすい。はくさいは耐肥性が強く施肥量の増加が収量の増加に結びつきやすい。しかし**多肥は軟腐病などの病害や心腐れ症などの生理障害の発生を助長**する。

10a当たりの養分吸収量は窒素18～28kg、リン酸6～10kg、カリ30～50kg程度である。養分吸収量は全体に多く、特にカリの吸収量が多い。はくさいの窒素吸収量は通常20kg/10a程度であり、20kg/10a以上吸収するとぜいたく吸収気味となる。窒素成分はレタスの2～3倍量を吸収する。

外葉の展開期から結球初期（定植後4～6週頃）まで急速な吸収が行われる。窒素の吸収は中期に最高になり、それ以降はやや弱まる（図1）。

はくさいの窒素施肥量は20～25kg/10a程度で栽培されている例が多い。はくさい栽培の多くは全面マルチ栽培のため基本的には全量を基肥とする。施肥量が多く濃度障害を起こす心配がある場合は、緩効性肥料を活用する。ゴマ症など生理障害の発生軽減のため株間はできるだけ広げる。大玉生産も多肥栽培で行うことには限界があり、株間を広げることで結球部の重量が増加する。はくさい栽培では堆肥が併用される場合も多く、堆肥からの肥料養分を考慮するとともに、地力に応じた適正な施肥を行う必要がある。

表1 目標収量と養分吸収量

目標収量 (kg/10 a)	養分吸収量(kg/10 a)				
	窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土
8,000	21.8	8.8	37.0	16.7	5.3

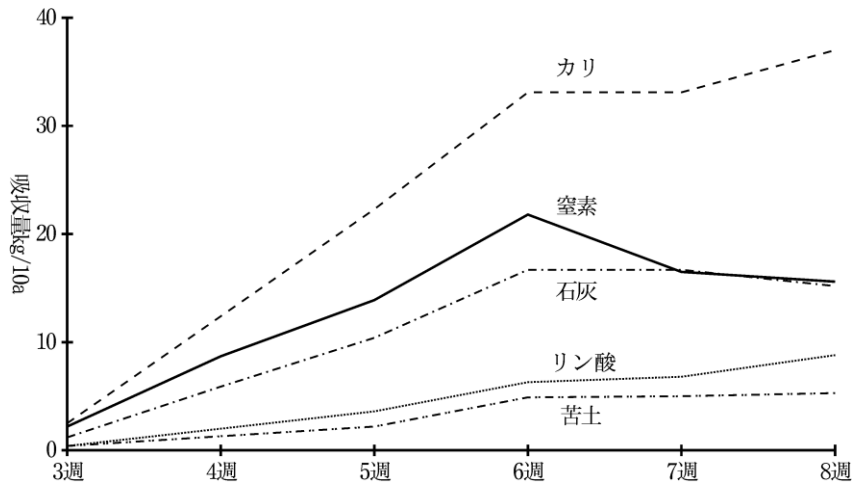


図1 定植後の養分吸収量の推移(営技セ 平成10年)